

『必要とされなかった話』

波那

「一つだけ：約束して。どんなことがあっても生きる、って。」

三友恒平みともさんのデビュー作『必要とされなかった話』（二六二コミックス）。タイトルにズシっとくる。うっそうとした森からじっと鋭く見つめてくる少年がひとり。彼が主人公の織春である。

とある村で貯蔵庫が焼け倉庫番の家族も焼死するという事件が起きた。村長は一人ずつに何げなさを装って各々が唯一必要とする者を訊ねてまわり、その結果容赦のない選別が執行される。誰からも名指しされなかったら名を△不要な人▽として“灰積み”へと追放するという過酷な切り捨て。現代からはかけ離れた昔話風の世界の、薄寒くヒリヒリとした切迫感が冒頭から伝わってくる。

織春少年は姉の糸乃とふたり孤児ながら仲良く暮らしていた。村長の問いには即答で姉と応えた織春。しかし姉は結婚間近だったため村長の意図に気づかず弟ではなく婚約者の惣一郎を選ぶ。そのため失意の織春は追放される側に回ってしまった。

△不要な人▽が死後も野晒しになっているような不吉な“灰積み”の森。生きる望みを失ったあとでも死に切れずにいた織春は、前脚を片方失った狼と、姉にもらった刀のお陰で命拾いをする。片や未熟な子どものもので、片や傷を負いボスの座を失墜した身でそれでも生き延びる希望が見えたとき、織春と狼との間には次第に支えあう絆が生まれる。△死▽しか選ぶ道が見えなかった織春の未来に、はじめ△生▽への希望が芽生えていく瞬間の△死▽と△生▽の対比が、闇夜のなかの一条の燐光のように鮮やかだ。

そこへ“灰積み”へ追放されたうちの二人、村の倉庫番の長女・水奈子（第2話）と村長の孫・道雄（第4話）が絡んでくる。織春は二人と話すうち村の火災の真相と、人望厚き村長の孫が“灰積み”送りになった理由を悟る。織春が村にいたころに見えていた二人の姿と、彼らに訪れた不条理な不運が変えてしまったものとの落差が衝撃的だ。ふとしたしぐさや表情や言葉の端々に滲む感情がまなざしや口元に表れるようすを、カメラワークを思わせるコマ割が巧みにとらえている。

傷を負った狼を伴った織春と、各々の思惑から彼と結託しようとする道雄と水奈子。△不必要な人▽の烙印を押された者たちがそれぞれに必要な者を探し合う。道雄は自らの将来を破滅させた村長と村への復讐に役に立つ者を探し、水奈子はひとり死ぬ淋しさを埋めるために燧石を持ち歩き心中仲間を探していた。必死に生き延びようと望む織春とその真逆を希求する彼らとは相いれない△溝▽ができる。極限の場所に生きる者同士でさえ互いの△必要な人▽になれないという酷薄な結果に、ふたたび△不必要な人▽の屈辱を味わった道雄と水奈子は、やがてそれぞれ利になかったある目的へと結びついてゆく。

場面は変わって織春と糸乃の再会が描かれる後半（第7話）。再会は果たしたものの、織春と読者の予想を裏切るかのように、糸乃は夜明け前にそっとひとり立ち去ろうとする。

「春。自分以外の誰かに生きる理由を預けないで。私は必要な人として、

あなたを、選ばなかった。

だけど、勝手かもしれないけど、どんな場所でも生きていてほしいのよ。」

「どんなことがあっても生きる。」前夜にそう誓い合った後にすっと境界線を引くように弟との別れを選ぶ姉。糸乃はどこまで身勝手で薄情な姉なのかと織春でなくとも衝撃を受けてしまう場面である。

ところがあとから読み直してみると、少し前の場面で、織春が理不尽に追放された頃に弟を想う糸乃がそっとつぶやくところがある。

「私達は、いつかは一人で生きられるようにならなければならない。

いつ 誰が いなくなっても いいように。」

孤児として必死に弟を守りながら生き抜くためとはいえ、なんと殺伐とした想いだろう。未熟で偏っている決めつけることは簡単だが、求めて得られなかった温かい支えを諦めたあとに彼女が得た醒めた強さは、こちら側が彼女に期待するやさしさが半端に感じられるほどだ。これが糸乃の秘められた真意だとすると、弟へ野性の狼のようにシビアな試練を課してそれでも生きていくことを願う、愛情深い姉の姿が見え始める……。

糸乃・織春、狼はそれぞれに互いを△必要として▽生きてきた。しかし後半では次第にその役目が変わっていく。糸乃・織春の姉弟と三本脚の狼それぞれの未来は困難に満ちた過酷さを予想させるが、そのなかで織春が最後に守ってくれた存在の庇護を離れて一步を踏み出すラストが、ひとまわり大きく成長した若い狼の独り立ちを思わせて清々しい。

平穏で幸せのときに人と共に生きようと願い、不遇なときにも一緒にいようと願うことはごく自然なこと。その前提がもしも極限まで毀れてしまったら、温もりが全く通用しない酷薄な環境では人はどうやってひとりで生きていくのか。その過程で直面するへ必要とされるVかへ必要とされないVかという境界に生じるへ溝Vの存在を、どこまでも著者はクールに描き切っている。そのくせ酷薄で救いのない話に終わらないのは、ひとりで生きるために必要なこともさりげなく織り込まれているからだろう。本作は説話のようなファンタジックで寓意に満ちた物語でありながら、読者の心の奥底に無意識に封印されていた薄暗い心情にひたひたと迫ってくるような不思議なリアリティを持った秀作である。

なお初期短篇集*『とても透明でやさしいしあわせ』に収録された「もりびと」「しぬまで」も寓意に満ちた作品のなかに本作の水奈子にみられるような純粹で静かなへ狂気Vを描いた、読後感にざらつきのある異色な作品である。作品群のタイトルも内容も毒を含むアクの強さで本作以上に好みの分かれそうな一冊だが、作者の初期作品群が本作に至る熟成過程に興味を持たれた方は併せてどうぞ。

*「入」コミックスrareレーベル(小学館)より2010年5月に発売。

波那(はな)
静岡県在住。夫十子ども2人の4人暮らし。
ネット書評家・五行歌人
2008年オンライン書店ビーケーワンに
wildflower名義で書評を書き始める。
2009年5月9日「書評の鉄人」
2009年10月16日「書評の鉄人列伝195回」
<http://www.bk1.jp/contents/shohyou/retuden195>
2010年3月9日通算書評数200本達成。
隔月刊誌『グランパピエ』に書評の連載中

本を読むだけでなく、
読んであげるだけでもなく
何か、もっと先へ。
そう思って始めました。
食事と同じく、
読書は私たちの栄養に
なってゆくもの。
私の評は、その美味しさの
一滴をお伝えするために
在ります